「体験活動の意義」　健全な人間性の育成

「子どもの体験活動が乏しい」と言われて久しい。新教育課程の改善事項にも「体験活動の充実」が言われているが、どの程度実施できるか、現状では難しい。

実は、国立青少年教育振興機構が「体験活動を多く行っている子どもほど、自立的生活習慣を身につけていて、自己肯定感も高い」などの調査結果を発表している。対象は小・中・高校生の子どもと保護者である。多くの保護者に伝えたい興味深い内容で埋まっている。例えば、子どもはナイフや包丁などをどの程度使えるであろうか。バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席を譲ったことがあるだろうか。山登りやハイキング、昆虫採集といった自然体験はどうであろうか。このような体験が多い子どもは、大人になってから社会生活を豊かにできるという。「子どもの頃に体験活動を行った保護者ほど、人間関係能力や自尊感情が高く、自立的な行動習慣が身についている」というのが調査結果である。

調査は、子どもの頃の体験を「友だちとの遊び」「家庭行事」「家事手伝い」「自然体験」「動植物との関わり」に求めている。例えば、子どもの頃「ままごとやヒーローごっこをしたこと」の多い場合は、「電車やバスに乗ったとき、お年寄りや身体の不自由な人に席を譲ろうと思う」大人になるという。また、生活体験の多い子どもは、大人になって道徳観・正義感が強くなるという相関関係を示している。それだけではない。子どもの頃の生活体験が多い場合、大学・大学院へ入る最終学歴も高いとか、大人になって年収が高いという相関まで示している。また、この調査から「中学生の頃に海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと」や「小学校 4～6 年生の頃に、相撲やおしくらまんじゅうをしたこと」などは、年代が進むにつれ大きく減少していることもわかった。

このように、子どもの頃の体験を通して得られる資質・能力（体験の力）を「共生感」「自尊感情」「意欲・関心」「文化的作法・教養」「人間関係能力」「規範意識」「職業意識」としている。例えば、「はしを上手に使うことができる」「日本の昔話を話すことができる」などの日本の伝統的な作法や教養も、自然体験、動植物との関わり、友だちとの遊び、地域活動、家族行事、家事手伝いなどの子どもの頃の幅広い体験と関係しているという。また、中学生の頃の地域活動や家事手伝い、自然体験などが大人になってからの自尊感情、共生感、意欲・関心、規範意識、人間関係能力、職業意識、文化的作法、教養と関係していることなどを示している。

このように、「体験活動」を通して健全な人間性の育成を充実させたいものである。

「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」より